



日本計量生物学会 ニューズレター

1. 巻頭言	- 1	6. 2025 年度年会・チュートリアルのお知らせ	- 5
2. 試験統計家認定制度について	- 2	7. 2025 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 5
3. 次期評議員（社員）予定者による懇談会 議事録	- 2	8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 5
4. 2022 年度理事会議事録	- 3	9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 8
5. 2024 年度統計関連学会連合大会報告	- 4	10. 2025 年度学会賞および功労賞候補者推薦の お願い	- 9
		11. 編集後記	- 9

1. 巻頭言「人生一期一会（疫学との出会い）」

大瀧 慈（広島大学）

1975 年 3 月に広島大学理学研究科（数学専攻）を修了した後、数学教室の電子計算機の管理と計算実習補助を担当する教務員の席を得ました。それまで、数式のための世界に住んでいたのでプログラミングの経験が皆無でしたが、実習で来ていた計算機好きの学生が数人いて、いろいろとノウハウを教えてもらいました。半年後に、広島大学の原爆放射能医学研究所（現・原爆放射線医学研究所）の生物統計部門の助手に転出しました。当時、疫学や統計学の知識も殆ど無く χ^2 検定を知っている程度でした。そのような状況下で原爆被爆者コホート研究 PJ を指揮していた疫学部門の栗原登教授から 2 つの課題が与えられました。①広島県在住の原爆の被爆者の実人数を求めること、と②発がんの数理モデルの開発、でした。課題①については、単純に見えるものの、実作業としてはとても泥臭い内容のものでした。収集されていた被爆者関連情報の原票には、手帳番号、氏名、現住所、生年月日、死亡関連情報、被爆状況などで、手帳番号は、手帳を発行した行政機関（広島市と広島県、国）によって別々のコードが付与されていたのです。レコードを個人単位に編集するには、姓名、性別や生年月日などのキー属性値が似ているレコード群を求めて照合し、それらから同一人のレコードを抽出し、共通の識別コードを付与する必要があったのです。作業はとても困難なものでした。その原因は、「似ている」という関係が同値関係ではないために「類別」が不能だったことにあります。そのデータ処理の現場では、2 人の男性技官（計算機処理担当）と 8 人の女性達（データの照合処理のための手作業担当）が

作業していました。この間、集計担当の技官の方々が持っている様々な裏技や長年の手作業でデータを扱っていた女性達から計算機処理では不可能な人間臭い直感による判断が重要であることを教えてもらいました。必要に迫られて、ポアソン回帰分析や生存時間解析などの多変量解析について、広島大学理学研究科で開催されていた金曜セミナーには毎週参加するとともに、西井龍映氏らと一緒に Prentice 教授や Rao 教授の本などを題材に勉強しました。課題②については、その後の私のライフワークになったのですが、幸運にも柳川堯九大教授から望外の励ましを賜り、文科省科研費などによる研究会などを通じて、少しずつ進めることができました。また、放射線影響研究所の PJ を通じて米国ワシントン州立大学 (UW) の生物統計学部門に 1985 年から 2 年間研修させてもらう機会を得ました。UW では、Breslow 教授らの有名な先生方の講義を受講でき、統計言語 S-plus に接し、当時最新鋭の PC を使ったシミュレーションに熱中しました。また、2 段階発がん数理モデル提唱者の Moolgavkar 教授との討論は良い思い出になっています。帰国後、暫くノパラメトリック回帰分析法に興じていましたが、その経験は後日、広島市からの依頼として、原爆による「黒い雨」の雨域推定のためのアンケート調査データの解析を受けた際に活かせることができました。その頃、福島第一原子力発電所事故が発生し、世間での放射線の健康影響に対する関心の高まりを受け、保健物理の研究者らとの共同 PJ として「放射性微粒子被曝による健康影響」を立ち上げることになり、原爆被爆者関連問題として「残留

放射線に被曝しただけで被曝（物理）線量は低いのに大きな健康被害を受けている方々が多いという謎に取り組むことになりました。その研究は大谷敬子氏らの協力を得て現在も続いています。数理の世界と放射線被曝の影響と現実の世界の双方を結び付けてくれた疫学との出会い

の半世紀でした。末筆になりましたが、先々週のこと彼岸花と金木犀の同時開花に遭遇し昨今の地球温暖化の危機を感じています。計量生物学に関わっておられる皆様にはこの喫緊の危機を回避すべく対峙していただくことを願っています。

2. 試験統計家認定制度について

大門 貴志, 柴田 大朗, 長谷川 貴大（試験統計家認定担当理事）

2017年4月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を、試験統計家（trial statistician）として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則、Q&A、審査基準等の詳細については、学会HPをご覧ください。

試験統計家は、臨床研究のデザインと解析の科学的・倫理的側面の責任を負う「責任試験統計家」、臨床研究のデザインと解析に関連する実務を行う「実務試験統計家」の2種類の区分からなり、2024年4月時点で責任試験統計家29名、実務試験統計家74名が認定されています。

今後の予定は以下の通りです。なお、2025年度の認定申請のためには2022年4月～2025年3月の間に開催された認定講習会への参加が必須です。なお、2024年度認定講習会は全日程で終了し

ております。

・2025年3月：2024年度申請分 責任・実務試験統計家認定および更新認定

・2025年5月～7月：2025年度 責任・実務試験統計家認定申請受付

・2025年9月：2025年度 責任・実務試験統計家更新申請受付

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内（5年間）に30単位が必要です。日本計量生物学会年会・計量生物学セミナー・計量生物学講演会については試験統計家認定委員会が発行する単位認定の受講証、それら以外については参加証等の証明書類が認定更新時に必要となりますので保管をお願いいたします。

また、試験統計家認定の更新の申請は、有効期間内または有効期間の満了後1年以内に行ってください。

3. 次期評議員（社員）予定者による懇談会議事録

寒水 孝司, 田栗 正隆（庶務担当理事）

日時：2024年11月14日（木）17:00～17:40

Zoomによるオンライン開催

出席：（東日本）

浅野, 安藤, 伊藤（陽）, 上村, 大庭, 口羽, 五所, 坂巻, 篠崎, 柴田, 菅波, 寒水, 高橋, 田栗, 長島, 平川, 船渡川, 山本（紘）, 山本（英）, 横田

（西日本）

大森, 嘉田, 川口, 小向, 佐藤, 新谷, 田中, 長谷川, 服部, 古川, 松井, 室谷

欠席：（東日本）

岩崎, 丹後, 野間, 松山, 山口

（西日本）

伊藤（ゆ）, 大門, 手良向

出席社員数：総社員数40名

出席社員数39名（委任状出席含む）

議長：代表理事 服部聡

審議事項

第1号議案 会長の候補者の選出

会長（兼：理事）の候補者を互選により選出することが確認された。服部会長から、自薦・他薦の順番で候補者を募り、その上で、候補者が複数の場合は、選挙によって会長の候補者を選出することが提案された。その結果、服部聡氏が自薦し、松井茂之氏が服部聡氏を推薦し、出席者32名による信任投票が行われ、出席社員全員の一致で賛同が得られた。

第2号議案 理事の候補者の選出

理事選挙（投票期間：10月21日（月）～10月28日（月）、開票日：10月30日（水））の結果、投票者数は40名中36名であったことが報告され

た。会長候補者を含めた 13 名（五十音順，敬称略）を理事の候補者とするについて。出席社員全員的一致で賛同が得られた。その後，11 月 20 日までに，理事の選出について辞退の申し込みがあった候補者を除いて，理事選挙の得票数に応じて繰り上げを行い，次の 13 名を理事の候補者とするに決した。

・選挙による選出：13 名（五十音順，敬称略）
大庭幸治，口羽文，五所正彦，寒水孝司，
大門貴志，高橋邦彦，田栗正隆，手良向聡，
長谷川貴大，服部聡，船渡川伊久子，松井茂之，
室谷健太

4. 2024 年度理事会議事録

○ 2024 年度 書面決議による理事会（第 3 回）
表決数 16 人（書面表決 0 人，電磁的方法表決 16 人）

審議事項

第 1 号議案 2024 年度 選挙管理委員会委員の委嘱について

2024 年 7 月 29 日，大庭理事が上記の理事会の決議の目的である事項を理事の全員に対して提案し，当該提案につき，2024 年 8 月 7 日までに，理事の全員から書面により同意の意思表示を得た。

○ 2024 年度 第 4 回対面（Web）理事会

日時：2024 年 8 月 30 日（金）17:00~19:00

Zoom によるオンライン開催

出席：服部，大庭，川口，口羽，五所，柴田，
寒水，大門，高橋，田栗，手良向，長谷川，
船渡川，松井，松山，横田，
山本（監事），安藤（監事）

定款第 35 条に従い，定足数を満たしていることを確認した後，定款第 34 条に従い，服部理事を議長として議案を審議した。

審議事項

第 1 号議案 入会申し込み

5 月 2 日（木）から 8 月 27 日（火）の期間に申し込みのあった 25 名の入会申し込みについて，全員異議なくこれを承認した。

第 2 号議案 統計関連学会連合の法人化について

統計関連学会連合の法人化について，全員異議なくこれを承認した。

第 3 号議案 会長以外の代表理事の候補者の選出

会長以外の代表理事として，後日，次期会長候補者が選出するという方針について，出席社員全員的一致で賛同が得られた。

報告事項

(1) 社員（評議員）選挙結果報告（選挙管理委員会）
選挙管理委員会委員長より社員（評議員）選挙の結果が報告された。

(2) 今後の予定

2025 年度の定時社員総会までの予定が報告された。

寒水 孝司，田栗 正隆（庶務担当理事）

第 3 号議案 第 35 回日本疫学会学術総会プレセミナー共催

第 35 回日本疫学会学術総会プレセミナーを共催することについて，全員異議なくこれを承認した。

第 4 号議案 IBC 2024 若手会員発表者への補助（奨学金）

IBC 2024 若手会員発表者への補助（奨学金）として，杉崎慶太氏（中央大学大学院）と能勢英雅氏（中央大学大学院）を補助対象者とするについて，全員異議なくこれを承認した。

第 5 号議案 次期評議員（社員）予定者による懇談会の日時

次期評議員（社員）予定者による懇談会を 11 月 14 日（木）17:00 から開催することについて，全員異議なくこれを承認した。

第 6 号議案 学術論文データベースへの収録依頼

EBSCO Information Services Japan 株式会社の学術論文データベース（EBSCOhost）に「計量生物学」を収録することの可否を引き続き検討することについて，全員異議なくこれを承認した。

第 7 号議案 国際の Senior Retiree Members の取り扱いについて

2025 年度以降の国際会員の会費について，国際計量生物学会の会費区分に従って，これまでの通常枠（65 ドル相当）に加えて，Senior Retiree 枠（35 ドル相当）を設定することについて，全員異議なくこれを承認した。

第 8 号議案 計量生物セミナー

計量生物セミナーの開催日時、開催場所、テーマ、オーガナイザー、予算について、全員異議なくこれを承認した。

第9号議案 2025年度年会

2025年度年会の開催日時、開催場所、特別セッション、チュートリアルセッションについて、全員異議なくこれを承認した。

第10号議案 試験統計家認定制度における取り組むべき課題と今後の議論の進め方

試験統計家認定制度の今後の進め方を引き続き検討することについて、全員異議なくこれを承認した。

第11号議案 BSネットワークの支援・学会での運営について

BSネットワークの支援・学会での運営の方針を引き続き検討することについて、全員異議なくこれを承認した。

報告事項

(1) 庶務関連

退会者、会員種別変更、会員数（8月27日時点）、宛先不明者、学会契約のZoomの契約期間を延長すること、理事・委員会が所有する文書の共有化の方針が報告された。

(2) 会報関連

146号の発行予定（2024年12月中旬）が報告された。

(3) 編集関連

45巻1号の発行状況、45巻2号の発行予定、投稿・査読の状況、46巻2号の準備状況、編集委員会の開催予定（9月4日（水））が報告され

た。

(4) 会計関連

本部への会員リストの送付、国際会費の送金、会員システムの導入の準備状況、各種支払い（2024年日本計量生物学会奨励賞賞金（2名）、2024年日本計量生物学会年会特別セッション講師謝金等、学生アルバイト・交通費、若手優秀発表賞（4名））、統計関連学会連合大会の計量生物企画セッションの講師の旅費・謝金などを「シンポジウム」枠で支払うこと、次年度の年会の会場費（富山国際会議場）を9月30日までに事前納付すること、IBC2024若手会員発表者への補助の対応が報告された。

(5) 企画関連

2024年度統計関連学会連合大会の準備状況、企画委員会の開催予定（9月4日（水））が報告された。

(6) 広報関連

統計関連学会連合大会の学会のブースにて、試験統計家認定に関するポスターを掲示することが報告された。

(7) 試験統計家認定関連

試験統計家認定制度に関する意識調査の結果、試験統計家認定審査（新規申請、更新申請、その他のスケジュール）、試験統計家認定講習会の予定が報告された。

(8) その他

Web選挙システム（i-Vote）による選挙の実施の予定、会員情報管理システム（SMOOSY）の導入の準備状況について報告があった。

5. 2024年度統計関連学会連合大会報告

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲（企画担当理事）

2024年度統計関連学会連合大会は、2024年9月1日（日）から5日（木）にかけて東京理科大学およびオンラインのハイブリッド形式で開催されました。本大会、チュートリアルの参加登録者数はそれぞれ945名、266名でした。日本計量生物学会からは日本計量生物学会奨励賞受賞者講演、日本計量生物学会シンポジウムの2つの企画セッションが行われました。

9月2日（月）の午後に、日本計量生物学会奨励賞受賞者講演が行われました。今回の奨励賞受賞者である尾崎凌斗氏、濱口雄太氏より講演がありました。尾崎氏の「Cox 比例ハザードモ

デルにおける竹内情報量規準による変化点検出」では、変化点を持つCoxモデルに対し、AIC型の情報量規準、モデル誤特定を許容する竹内情報量規準を導出し、その性能を評価した結果が報告されました。濱口氏の「ベイズ流メタアナリシスにおける予測区間の頻度論的性能評価」では、いろいろな無情報事前分布を使用した下で、ベイズ流の予測区間の頻度論的な性能をシミュレーション実験により評価した結果が報告されました。講演後は、活発な質疑で議論が盛り上がりました。受賞者である尾崎氏、濱口氏のさらなるご活躍を祈念いたします。



日本計量生物学会奨励賞受賞者の濱口雄太氏（旭化成）、尾崎凌斗氏（中外製薬）、座長の五所正彦氏（筑波大学）

9月3日（火）の午前には、日本計量生物学会発足40周年を記念して編纂された総説「疫学分野での計量生物学の発展」に関連するセッションとして、日本計量生物学会シンポジウム「感染症対策とデータ科学:COVID-19から次のパンデミックに向けて（共催：日本疫学会）」が行われました。COVID-19パンデミックの中、データ科学者として国や自治体等の新型コロナ対策の最前線で活躍された神垣太郎氏、西浦博氏、中谷友樹氏、米岡大輔氏、井元清哉氏から講演がありました。講演では、データ収集に関する困難さや限界、日々更新される膨大なデータへの

挑戦、行政との関わり、そして、研究者間ネットワークの重要性など、有事における活動の実際が紹介されました。困難な状況下で積み重ねられた経験が、今後の対策や取り組みに多くの示唆を与えるものとなりました。



日本計量生物学会シンポジウム講演者
左から、オーガナイザー・座長の高橋邦彦氏（東京医科歯科大学（当時））、米岡大輔氏（国立感染症研究所）、西浦博氏（京都大学）、中谷友樹氏（東北大学）、神垣太郎氏（国立感染症研究所）、井元清哉氏（東京大学）、座長の村上義孝氏（東邦大学）

6. 2025年度年会・チュートリアルのお知らせ

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲（企画担当理事）

2025年度日本計量生物学会年会およびチュートリアルを、2025年5月15日（木）及び16日（金）に富山国際会議場（<https://www.ticc.co.jp/>）で開催予定です（応用統計学会と共催）。2025年度も一般公演として口頭発表及びポスター発表を募集する予定です。是非とも講演申し込みをご検討下さいますようお願いいたします。

今年度も40歳未満の若手の正会員・学生会員を対象に「若手優秀発表賞」の表彰を行う予定です。セッションやチュートリアルの内容、講演及び参加申し込み等の詳細については、後日、学会HP（<https://www.biometrics.gr.jp/>）及びメーリングリストでご案内します。

7. 2025年度統計関連学会連合大会のお知らせ

伊藤 陽一, 平川 晃弘（統計関連学会連合大会プログラム委員）

2025年度統計関連学会連合大会は2025年9月7日（日）～9月11日（木）に開催されます。関西大学（千里山キャンパス）およびオンラインのハイブリッドでの開催を検討しております。チュ

ートリアルセッション、市民講演会、企画セッション、一般演題に加えてコンペティションなどを計画しております。ぜひご予約おきいただき、皆さまの奮ってのご参加をお願いいたします。

8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

8.1 ターニングポイント

私は東京大学疫学・生物統計学教室出身の生

竹内 由則（横浜市立大学データサイエンス学部）

物統計学・薬剤疫学の専門家として紹介される

ことがあります。実は東大農学部を卒業した獣医師であり、博士論文のテーマも「イヌの肥満細胞腫における分子標的治療に関する研究」です。学生として上記教室（正確には「生物統計学分野」）に在籍していたのは、大学院医学系研究科公共医学専攻（SPH）在籍時の1年に過ぎません。本稿では、私の歩んできた少し特殊な経歴について記したいと思います。

2008年10月、東大大学院獣医学専攻博士課程に在籍していた私は、国立京都国際会館で開催された日本血液学会総会に参加していました。私の獣医師としての専門は血液内科であり、当時は博士課程に在籍しつつ東大附属動物医療センター血液・腫瘍内科で研究および臨床に携わっていました。もちろん対象はイヌやネコですが、関連領域について“ヒトの”医学の最先端を学ぶことは重要と考え、“ヒトの”学会に参加していたのです。さて、会場で何気なくプログラムを眺めていたところ、（今は亡き）大橋靖雄氏という東大教授の「臨床統計」についての教育講演があることに気づきました。当時、獣医学の学部カリキュラムには統計学の内容がなく（！）、統計解析についてはいずれ勉強しなくてはと考えていたこともあり、その教育講演に出てみることにしました。

一定年代以上の読者の方にはご同意いただけるとは思うのですが、事前情報なしに大橋先生のご講演に曝露された時の衝撃は凄まじいものです。今考えてみると、統計学そのものに対する内容は限られていたのですが、“ヒト”医学領域でも統計学の教育体制は不十分であること、医学領域には統計学を専門とし生業とする生物統計家が存在すること、統計学（を含めた公衆衛生学全般）について専門的に学べるSPHが東大に設置されたことなどをお話いただいたと記憶しています。

2年後、博士論文をまとめつつ修了後の進路を考えていた私は、東大SPHに1年で修了できるコースがあることを知り、博士課程修了後に東大SPHに進学し、大橋先生の指導の下で生物統計学を勉強したいという決心を固めていました。大橋先生にその旨についてメールしたところ、入試に合格すれば問題ない旨、ご快諾をいただきました（自分も大学教員になった今となっては、何の紹介もなしに連絡してきた正体不明の獣医師をよく受け入れて下さったと思います）。となると問題は入試ですが、獣医公衆衛生学は学部でも当時1コマしか講義がなく、飼料衛生や食中毒の話が中心であったため、医学領域の公衆衛生学について一から勉強する必要がありました。そこで、つてのある後輩に、当時生物統計学分野のSPH（修士）2年生であった篠崎智大

さん（現東京理科大）を紹介してもらいました。

（今と変わらず）フレンドリーな篠崎さんから学部の講義資料や教科書、篠崎さんの作成された“ウィットに富んだ”入試の過去問解答例をお借りした私は、医師の友人から紹介された「公衆衛生学サブノート」と併せて農学部図書館の自習室に籠る日々を送り、なんとか東大SPH・1年（修了）コースに合格することができました。

当時の東大生物統計学分野の教員は大橋教授を始めとして、松山裕准教授（現教授）、竹内文乃助教（現中央大）、上村夕香理特任助教（現国立国際医療研究センター）、飯室聡特任助教（現国際医療福祉大）という構成でした。学生では、博士1年になられていた篠崎さんの他、博士3年に坂巻顕太郎さん（現順天堂大）、博士2年に佐藤泉美さん（現長崎大）、修士2年に横田勲さん（現北海道大）などが在籍していました。SPHでは疫学・生物統計学を含む講義・演習を受講し、研究室では抄読会（ゼミに相当）・勉強会などで先輩方の（当時はさっぱり理解できなかった）方法論についての研究の話聞き、獣医時代とは全く異なる世界に刺激を受け続ける日々でした。

私の課題研究（修士論文相当）テーマは、大橋先生が参画されていた「小児喘息に対する空気清浄機のランダム化比較試験」のパイロット研究として、研究室の関係者および本試験実施施設の医療関係者自宅のダニ抗原を評価し、抗原量と各要因との関連を評価するというものでした。本研究で最も労力を要したのは、専用のフィルターを搭載した掃除機（わりと重い）をバッグに入れて被験者のご自宅を回り、寝具から抗原を採取するという地道な作業でした。シンプルな重回帰モデルの結果、自宅の築年数のみが統計学的に有意に関連し、寝具の洗濯頻度などは影響しない（頻繁に洗濯してもダニ抗原は減らない）という身も蓋もない結果が得られました。今となってみれば、統計解析や結果の解釈、論文の構成などは稚拙なものでしたが、臨床試験の現場（？）に初めて触れることができたのは良い経験でした。

SPHの修了が近づくと、再度進路について考える時が訪れます。当初は、1年間で出来るだけ統計学について学び、それを獣医学領域に持ち帰る予定でした。しかし、希望していた大学教員のポストは空きがなく、ポスドクあるいは臨床獣医師として働く可能性を模索していたところ、ふと医薬品医療機器総合機構（PMDA）が定例の専門職員の募集を出していることに気づきました。PMDAの審査専門員には統計担当のポジションもありますが、修士1年の経験のみでは対象外との情報が得られたので、採用されれば

(獣医師として) 毒性審査担当となるだろうと思いつつ、1年間生物統計学を学んだことを志望理由書でアピールしつつ応募しました。その後、幸い2次面接に進んだ私は、当時安全第一部の部長であった池田三恵氏より、「薬剤疫学をやってみる気はないか?」と尋ねられました。SPH在籍時に日本科学技術連盟の「薬剤疫学セミナー」に書記として参加していた私は、即座に「興味があり、ぜひやってみたい」と回答しました。結果として私はPMDA安全第一部調査分析課に配属となり、そこで4年間にわたり薬剤疫学研究手法を用いた医薬品市販後安全性評価に携わることになります。

長々と書いてきましたが、俯瞰してみると獣

医師から生物統計学・薬剤疫学の専門家へと移行する過程にはいくつかのターニングポイントがあったように思います。特に(故)大橋先生との出会いとSPH進学、そしてPMDAでの配属先の影響は非常に大きく、その方向性を大きく決定しました。同じ年代の専門家の方々と比して生物統計学・薬剤疫学領域における経験・知見は明らかに浅く、引き続き精進を続けていく所存です。最後に、方向性の定まらない私の進路を心暖かく(?)見守り、現在の専門領域に導いてくださった、教員の先生方、先輩方、元・現同僚の方々、そして家族にこの場を借りて感謝申し上げます。

8.2 計量心理学の未来に向けて

近年、校務などで学会年会にもほとんど参加できておらず、このような原稿を執筆させていただくのは大変恐縮ですが、せっかくいただいた機会ですので、計量生物学に関連した話題についてお話をさせていただければと思います。多くの方が私のことをご存じないと思いますので、まずは私の経歴について簡単に説明させていただきます。なお、タイトルは誤字ではありません。

もともと臨床心理学を中心とした心理学全般に興味があったため、どのような学びが得られるのか明確にはわからないが面白そうな大阪大学人間科学部に入学しました。その後、学部3年生で研究室に配属される頃には犯罪心理学に興味を持ち、犯罪行動分析への計量的なアプローチを勉強しつつ、卒業論文では正則化法に基づく非線形因子分析モデルの開発に取り組みました。この時期に、数理的な考え方が自分に合っていると感じるようになり、統計学の方法論の研究に楽しさを覚え始めていました。

その後、同大学大学院人間科学研究科の博士前期課程に進学し、行動科学や社会科学で利用される統計手法を研究する傍ら、当時大阪大学に所属されていた濱崎俊光先生、寒水孝司先生、杉本知之先生による医学統計学の授業を履修しました。この授業は私にとって大きな転機となり、統計専門家が医学研究に深く関与している様子を知ったことで、これまでの統計学の方法論研究者に対するイメージが一変しました。

結局、この授業を履修したことがきっかけとなり、博士前期課程修了後は製薬企業において医学統計専門家としてのキャリアをスタートさせました。製薬企業では、医薬品開発に従事する貴重な経験を積むことができ、当時お世話になった

山本 倫生 (大阪大学大学院人間科学研究科)

方々には今でも(密かに)感謝しています。ただ、研究の楽しさが忘れられず、職を辞した後は、大阪大学大学院基礎工学研究科の博士後期課程に進学し、因子分析や関数データ解析手法の開発についての数理的な研究を行っておりました。

博士号取得後はポスドクとして半年ほど自由を謳歌した後に、縁あって京都大学医学部附属病院に採用され、臨床試験や疫学研究における統計解析担当者としての業務に従事することとなりました。最初は企業での経験とは異なる振る舞いが求められることに戸惑いましたが、上司であった森田智視先生をはじめと多くの先生方のご指導のおかげで何とか業務をこなしておりました。この京都大学での経験は、実証科学の研究者との共同研究を行う際の、私の取り組み方の基礎を築いてくれました。その後、岡山大学環境理工学部で数理の教員としての経験を積んだのち、2年前に大阪大学大学院人間科学研究科に着任し、現在に至っております。

さて、現在の所属先では、医学・疫学分野での研究活動に加え、計量心理学の専門家として教育や研究に取り組んでおります。そもそも計量心理学とはどのような学問かご存じない方も多かもしれません。日本計量生物学会の設立趣意書では、計量生物学を「生物学や医学、環境科学などの諸分野で計量的・数学的・統計的手法を用いる学問」としています。一方、計量心理学は心理学分野で同様の手法を用いる学問です。両者は「測る」対象が異なるだけで、手法の数学的な部分の多くは共通しています。

計量心理学の専門家として活動する中で、計量生物学の環境の充実ぶりに感心させられることが多々あります。特に、人材育成に関して、近年

では AMED の生物統計家人材育成推進事業などを通じて、多くの生物統計家が育成されています。また、理工系の学部や研究科で医学統計学を学ぶ場が充実している点も素晴らしいと思います。

一方で、計量心理学ではどうでしょうか。国内において計量心理学、特にその数理的な方法論を専門とする研究室は、私が観測している範囲ではごく少数であると思います。医学分野では諸先生方のご尽力により、統計専門家が各大学病院や理工系の研究室に存在している一方で、心理学分野ではいまだに「レアキャラ」のままです。この状況は、2000 年代後半に心理学分野で再現性の危機が指摘され、研究内での統計的な厳密な検証の重要性が高まる中でもあまり変化はなかったように思います。

計量心理学の未来を担う専門家を育成することは、心理学界や統計学界にとって重要な課題だと考えています。そのため、私としては少しでもこの状況を改善するため、まずは教育面において学生に計量心理学や統計学の魅力を伝え、未来の統計専門家を一人でも多く育てたいと思っています。その際には、計量生物学の人材育成基盤を参考にしつつ、計量心理学でも人材育成のフレ

ームワークのようなものが構築できればよいなあと日々妄想しております。

ここまで、計量生物学の未来に関することには何も触れられておらず恐縮ですが、本原稿執筆時点で、指導している学生のうちの一人が、来年度より製薬企業で医学統計専門家として医薬品開発の世界に進む予定です。私の力不足から計量生物学の未来に貢献できることはそこまで多くありません。しかし、例えば、指導する学生が製薬企業や ARO での生物統計専門家の道に進むことをサポートすることが、一つの貢献方法であると考えております。特に、心理・行動科学や社会科学で学んだ学生が製薬企業や ARO で生物統計専門家として働くことは、チャレンジングですが教員としてはそれを支援できることにワクワクしています。ちなみに、そのようにして医学統計学の世界に足を踏み入れた学生が、心理・行動科学や社会科学の分野に舞い戻ってきて、計量心理学と計量生物学の両方の分野に新しい風を吹かせてくれることを密かに期待しています。もちろん、私自身も方法論の研究を続け、計量生物学の発展に少しでも寄与できるように努めてまいりたいと思います。

9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

五所 正彦（編集担当理事）

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の 5 種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004 年度から学会に 3 つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES に掲載された論文の著者（単著でなくても第 1 著者かそれに準ずる者）で原則として 40 歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年 1 名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くとか公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投

稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。

10. 2025 年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

松山 裕, 松井 茂之 (学会賞担当理事)

一般社団法人日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は理事会での協議のうえ社員総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。

日本計量生物学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞

功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛、あるいは学会賞担当

これまで著者から論文掲載料をいただけてきましたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

理事に郵送または電子メールにてお送りください。受賞者の発表と表彰は4月の会員総会で行います。いずれの賞もニューズレターなどで受賞理由を公表いたします（推薦者は非公表です）。

推薦書の様式：A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先（住所、電話、e-mail）
- 2) 推薦理由（略歴含む）
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名（複数の場合は全員）
- 5) 推薦者（複数の場合は代表者）の所属および連絡先（住所、電話、e-mail）

推薦締め切り期日：2025年1月31日（必着）

推薦書送付先：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階

（財）統計情報研究開発センター内
一般社団法人 日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

11. 編集後記

学会の2025-26年度の体制が決まってきました。会報の次期評議員（社員）予定者による懇談会議事録をご覧ください。評議員（社員）の任期は1月から、新理事会は3月の社員総会からです。

IBC2024は米国アトランタで2024年12月8日

～13日に開催です。次回の会報でIBC2024の様子をお伝えしたいと思います。IBC2026は韓国のソウルで開催予定です。

（紅葉の立川より）

日本計量生物学会会報第146号
2024年12月11日発行

発行者：日本計量生物学会
発行責任者：服部聡 編集者：船渡川伊久子、田栗正隆